

差異の繫争点

目次

はしがき……………山本崇記 *vii*

序文 差異の繫争点——本書の狙い……………天田城介	1
1 差異の繫争点	1
2 十分に論じられてこなかったことを論じる	2
3 異なる身体をめぐる争い	5
4 もつれあう差別と抗い	8
5 差別の体制	10

第1部 異なる身体をめぐる争い——病と社会運動

第1章 病者の生に宿るリズム……………有菌真代	17
——ハンセン病患者運動の「多面性」に分け入るために	
1 病者のリズム	17
2 草創期のハンセン病患者運動——自治の模索	20
3 終戦直後の状況——「五療養所患者連盟」から「全患協」結成へ	21
4 らい予防法闘争	23
5 予防法闘争後の患者運動——強いられた「妥協」	28
6 所得と給付金をめぐる運動	30
——視覚障害者と在日朝鮮人・韓国人患者との連帯	
7 通底するリズム	35
第2章 西陣地域における賃織労働者の住民運動……………西沢いづみ	41
——労働環境と医療保障をめぐる	
1 医療受診への諦めのなかで	41

2	西陣の医療運動・労働運動の戦前-戦後のつながり	43
3	西陣の地域性と西陣機業	45
4	賃労働者と労働組合運動	47
5	賃労働者の組合運動と住民組織の運動	52
6	住民運動のなかへ	58
第3章	血友病患者本人による社会と結び付く活動の生成……北村健太郎	62
	— Young Hemophiliac Club 結成を中心に	
1	家族と離れて、社会と接する	62
2	血友病をめぐる社会的状況	64
3	パンフレット「若者よ 集まれ！」	66
4	「青年の集い」の開催	68
5	Young Hemophiliac Club の結成	70
6	“ホーム・インフュージョン”への期待	73
7	社会との結び付きの模索	74
8	YHCと全友にできた溝	76
9	激痛から遠ざかって、社会との関わりを求めて	78
【エッセイ】	忘れられたくない／忘れたい、のはざままで考える・・吉田幸恵	85
	— 「解体」するハンセン病患者の共同性のゆくえ	
■	荒れ果てた空き地が意味するもの	85
■	「黒川温泉宿泊事件」とは	85
■	この事件で浮き彫りになったものは何か	87

第II部 もつれあう差別と抗い——再編される性的秩序

第4章	トランスジェンダー・性同一性障害者の職場における実践と課題	
	— 労働規範と性別二元規範・異性愛規範 ……………高橋慎一	93
1	トランスジェンダー・性同一性障害者の語る身体の過剰	93
2	調和的・同化的当事者の聞き取り	96
3	非調和的・非同化的当事者の聞き取り	105
4	制度の限界と規範変革の可能性	114

第5章	在日韓国人コミュニティにおけるレズビアン差別……堀江有里	119
	— 交錯する差別／錯綜する反差別	
1	「差別」をめぐる諸相——折り重なる差別のなかで	119
2	在日大韓基督教会における「レズビアン差別事件」	121
3	「差別事件」の形成	123
4	「事件」のなかで不可視化されるレズビアン	132
5	複数の視点からみる差別問題への取り組みに向けて	134
第6章	主婦の労働実践としてのワーカーズ・コレクティブの岐路……村上潔	140
	— 「依存」と「包摂」のあいだで	
1	主婦と「社会的包摂」、という美しき結びつき？	140
2	主婦の労働実践としてのワーカーズ・コレクティブ	141
3	主婦の「外部」からのワーカーズ・コレクティブへの流入	146
4	ワーカーズ・コレクティブの変容の意味	149
5	「包摂」役割への期待	151
6	「依存」する主婦の取り組みとして	156
7	歴史の変わり目に立つ	158
【エッセイ】	追憶——「異なり」支援の学校から……梁陽日	165
	■ 表出した生徒の「気持ち」	165
	■ A学園の試みと困難	166
	■ ブレ・混沌の先は見えるか	168

第Ⅲ部 差別の体制——言説と装置の診断

第7章	「沖縄問題」の「入り口」で……大野光明	175
	— ベ平連の嘉手納基地ゲート前抗議行動と渡航制限撤廃闘争	
1	「沖縄問題」に取り組む日本本土の人々	175
2	ベトナム戦争のインパクト	176
3	1968年8月、米軍嘉手納基地前抗議行動と渡航制限撤廃闘争	182
4	立場性をめぐる議論の噴出	186
5	「沖縄問題」の「入り口」の構造を越えて	191

第8章 やくざ集団の形成と差別……………山本崇記	197
— 部落民／朝鮮人という問いとの関係から	
1 やくざ「である」(be)と「になる」(become)	197
2 集団の病理から被差別という社会問題へ——やくざ研究の視点	199
3 分岐と交差の条件	204
4 差別の問い方	213
5 集団性の位相	214
第9章 社会調査者はなにを見たか……………森下直紀	218
— 水俣病被害の構造的理解を求めて	
1 水俣病を「社会調査」することとは	219
2 公害発生・社会的抑圧の析出	222
3 公害研究と水俣病	230
4 被害実態研究の時空間的拡大	230
5 社会調査研究が「水俣」でなすべきこと	237
第10章 国家の眼としての貧困調査……………小泉義之	241
1 不可視の貧困を可視化すること	241
2 排除の可視化と包摂の空手形	246
3 低所得者層の可視化	253
4 不可視化される国家	258
<hr/>	
終章 思想と政治体制について……………天田城介	267
— 精神医学のエコノミー	
1 「マイノリティ」をめぐる過去と現在をいかに評価するか	267
2 周縁的な人間の監視＝矯正へ	269
3 精神医学と刑罰——番犬システムとして	275
4 ソ連における精神医学と収容所	277
5 反精神医学の位置	284
6 統治システムの不断の編成をめぐる思考へ	289
<hr/>	
あとがき……………天田城介・村上潔	295